

# 英語と日本語の語彙の比較 —国際理解教育の一環として—

佐藤 義隆

文化創造学部文化創造学科文化創造学専攻

(2010年9月14日受理)

## A Comparison of Vocabulary in English and Japanese —as a Part of Education for International Understanding—

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SATO Yoshitaka

(Received September 14, 2010)

### 1 国際理解教育

英語は現在、国際補助言語として広く使われており、地球上の異なる言語・文化を持つ多様な人々を結びつける働きを果たしています。英語は世界中で10億近い人々によって用いられていて、世界の航空管制、電話、電報、新聞等は英語を媒体としていますし、インターネット上の情報の9割が英語で占められています。まさに英語は、English as a Global Languageの役割を果たしています。だから、英語教育を国際理解教育の一環としてとらえることは当然のことであると考えられますが、「国際理解教育」という言葉は、他の国の文化や習慣を理解するためだけの教育ではなく、他にも目標があります。従って、国際理解教育の定義を明確にし、その目標を明示し、国際理解教育は学習者の何を育てるのかを明確にすることから始める必要があると思います。村野井仁他著『実践的英語科教育法』（成美堂）をもとに、国際理解教育についてまとめてみたいと思います。

#### (1) 国際理解教育の定義

国際理解教育を最も積極的に推進してきたのはユネスコ（国際連合教育科学文化機構）です。ユネスコは、国際理解教育（education for international understanding）が、世界平和実現のために不可欠であるという態度を、「ユネスコ憲章」はじめ、「ユネスコ宣言」の中で、一貫して表明しています。1974年にユネスコ総会で採決された勧告は、「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告<sup>1)</sup>」と題されています。ユネスコにとっての国際理解教育とは、国際理解に加え、国際協力（international cooperation）、国際平和（international peace）への努力を含んだものであることがわかります。

#### (2) 国際理解教育が育てるもの

##### 1) World Studies

多くの国際理解教育のモデルとされているのが、英国の“World Studies”です。これは、英国の、8歳から13歳の小・中学生を対

象としたカリキュラムで、次のように定義されています。

Studies which promote the knowledge, attitudes and skills that are relevant to living responsibly in a multicultural and interdependent world<sup>2)</sup>

多文化社会, 相互依存社会の中で, 責任を持って生きることに密接に関連した知識, 態度, 姿勢, 技能を学ぶことを促進する学習

これらを学習すると, 国際感覚が育ち, 異文化を理解・受容し, 相互依存社会の一員としてどのように振舞うべきかがわかりますし, 情報収集能力やコミュニケーション能力といった技能が育ち, 批判的思考能力が高まり, 目覚めた市民として, 地域, 国家, 世界のあり方に積極的に関わっていくことができるようになると思います。

## 2) 国際感覚

英語ができると国際感覚や国際性があるという, 誤った認識の風潮が無きにしても非ずですが, 国際理解教育の対象は, 欧米だけではなく, 世界全体であること, そして国際感覚の内容も, 国際社会に生きる地球市民として, どのようにしたら共に平和で幸せな生を全うできるかという知恵を持つことが含まれてきます。その知恵の主なものを書くとき大体次のようになると思います。

1. 自分の足元から世界を見つめ, 地球の未来について自分の頭で考えていこうとすること
2. 歴史の事実をありのままに見つめてそこから目をそらさないこと
3. 自分の内部に生まれてくる偏見を自覚し, それと闘い続けること
4. 自然と人間の共生を考えること
5. 世界の相互依存関係を認識し, 人々と世界の問題を共有できること
6. 自分の国の利益だけにとらわれず, より広い普遍的な発想を持つこと

7. 世界的な問題の解決に向けて討議に参加し, 知恵やアイデアを出し, 身近なところからでも行動していこうとすること  
このように, 国際理解教育は壮大な内容を持っていますが, 本論文では, 国際理解教育の一環として, 英語と日本語の語彙のニュアンスの違いを主に学習し, 異文化を理解し, 受容していく姿勢を高めていくことの一助としたいと思います。

## 2 異文化の理解と受容

### (1) 言語相対説

ある特定の言語での事象の切り取り方, 捉え方には, その言語を話す人々の認識の有り方が反映されています。この, 「私達の話す言葉と私達の認識の有り方には深い関連がある」という考え方は「言語相対説<sup>3)</sup>」と呼ばれています。これは, アメリカの文化人類学者であり言語学者でもあったサピア (Edward Sapir) と, その弟子ウォーフ (Benjamin Whorf) によって, 1930年代に提唱された学説です。

例えば, ある言語で, 区別されるのが当然だと思っているようなことが, 他の言語では区別されないことがよくあります。日本語では, 調理されているか否かで米 (こめ) と飯 (めし) とに区別するところを, 英語ではどちらも rice です。特に区別したいときは, uncooked rice とか, cooked rice のような複合表現になります。同じことが, 日本語の「水」と「湯」に対する英語の water についてもいえます。water という英語は, 温度という意味内容を持たないので, 特に区別したいときには, cold water とか hot water という複合表現になります<sup>4)</sup>。

こうした驚きは, 英語を勉強しているといろいろでできます。「兄弟」, 「姉妹」を区別

する単語がないのもその一つです。最近の新聞紙上の「英語の質問箱」にもこの質問が載っていました。翻訳家で河合文化教育研究所の研究員でもある里中哲彦氏のその質問に対する答えをまとめると大体次のようになります。一般に、英米では日本のように年齢による上下意識がなく、兄弟姉妹間でも、「お兄ちゃん」とか「お姉ちゃん」と呼び合う習慣もないこと。あえて区別するときは、兄だったらbrotherの前にolder, elder, bigのどれかをつける、弟だったらbrotherの前にyounger, little, kidのどれかをつけるということ。sisterの場合も同じ。英米社会では長幼の序の概念が希薄で、日本では、双子にも兄と弟、姉と妹があると知ると、英米人はとても驚くということも書いておられます<sup>5)</sup>。

(2) 英単語とその訳語である日本語とは100%同じものを指してはいない。

英語のhead, face, neckは、日本語の「頭」, 「顔」, 「首」と100%同じではありません。日本語の「首」はクビから上全体を指します。「首をかしげる」とか「敵の大將の首をとる」という言い方からもわかります。英語のheadは日本語の「頭」だけでなく、「顔」も含みます。John put his head out of the window. (ジョンは窓から顔を出した) Napoleon's head (ナポレオンの首から上の像)。また、英語のfaceはheadの一部でもあります。

それぞれの国の言葉が内包している意味を知らないと、双方に誤解が生じることとなります。一つの言語が、ある言葉を使って対象世界を整理し、まとめた単語は、他の言語の、一応は同じ意味の単語と思われるものと微妙に違っていることがわかります。そしてそれに気づかないのは、英語(外国語)と日本語を安易に対応させて分かったつもりになってしまうからでしょう。それは辞書

にも責任の一部があると思われます。「虹」はrainbow, 「犬」はdog, 「飲む」はdrinkと覚えることで、両者が等しい、同じ内容だと思ってしまうのも無理のないことですが、一応同じだということで始めなければ、学習は先に進まないという止むを得ない面でもあるわけです。こうしたことを補うこととして、鈴木孝夫氏は、「国語辞典」ではなく、「日本語辞典」を作るべきだと主張しておられます<sup>6)</sup>。日本語の語彙の内包する意味の違いや言語文化まで書いてあれば、相互理解の助けになると思います。

(3) 身近なものほど分類が細かい

文化によって、身近なものほど切り取り方が細かく、縁遠いものほどその切り取り方が大雑把になっています。これは、私達の認識についても同じことがいえます。それは、私達の認識が言葉に基づいており、言葉に支配されているからだといえます。例えば、日本人は昔から魚をよく食べてきましたので、魚を表す言葉が豊富です<sup>7)</sup>。魚の成長につれて、「ツバス」, 「ハマチ」, 「メジロ」, 「ブリ」というように名称が変わる、いわゆる「出世魚」があります。余談ですが、サラリーマン川柳に、「ブリはいい、生きてるだけで出世する」というのがあって笑いを誘いますが、それだけ人々の心の中に、「ブリ」の内包的意味が生きていることがわかります。

これに対して、魚より肉を主に食べてきた英語圏では、魚の名称は大雑把で、sole, butt, plaice, flatfishという英単語は、「ヒラメ」と「カレイ」の両方を指します。ハマチもブリも同じものだと思っていた日本に住むアメリカ人が、この名称の違いのことを知って以来、味の違いに気づきだしたという話を聞いたことがあります。私達の認識が、無意識のうち言葉によって左右されているというこ

とは、母語と異なる言語に触れてはじめてわかる場合が多いようです。

因みに、ボラも出世魚で、「ハク」、「オボコ」、「スバシリ」、「イナ」、「ボラ」、「トド」と変化していきます。これらの名称の中には、日本語の表現の中に深く根付いたものもあります。東北地方では小さな子どものことを「オボコ」といいますし、「粋でいなせないい男」の「いな」はこの「イナ」のことで、江戸時代に、日本橋の魚河岸の若者が、「イナ」の背に似た形にまげを結っていたところからきていますし、「とどのつまり」の「とど」はこの「トド」からきています。

一方、肉を主食としてきた英語圏では、肉に関する表現が豊富です<sup>8)</sup>。例えば、肉の部位を表すのに、sirloin, tenderloin, fillet, rib, tongue などがありますが、日本語にはこれらの区別はありませんでした。また、cow と beef, pig と pork, sheep と mutton のように、動物の名前と肉の名前とを使い分けられているものも多くみられます。また、肉とパンが食文化の要の西洋では、「焼く」ことが調理の中心のため、「焼く」にあたる単語が細かくなっています。丸焼きにする場合は roast, 網の上で焼く場合は grill (アメリカ英語では broil), パンをトースターで焼く場合は toast, ジャガイモやリンゴを丸ごとオーブンで焼く場合は bake, 野外で行う場合は barbecue, と使い分けます。日本語では、牛肉、豚肉のように、単に動物名に「肉」をつけるだけのパターンが多いようです。肉の部位で日本語になかった概念は、外来語としてカタカナで表記され、定着していきましたが、その過程で、もとの英語の発音とは変わってしまったものも多くみられます。舌を意味する tongue は「タン」に、牛・豚・鶏などの心臓を意味する heart は「ハツ」に、牛・豚などの胃を意味する guts は「ガツ」に、肝臓を意

味する liver は「レバー」に、などです。

### 3 その他の英語と日本語の語彙のニュアンスの違いのいくつかの例

2009年4月から2010年3月まで、NHKテレビで *TRAD JAPAN* という英会話番組がありました。この番組は、「英語で日本を語ろう!」をコンセプトに、様々な日本文化を英語で語れるようになることを目的としたものでした。そしてこの番組の中には、毎回“Words and Culture” というコーナーがあって、英語と日本語の語彙の比較をしていました。例えば、英語の sweet はいつも肯定的ニュアンスを含んでいるが、日本語の「甘い」には否定的ニュアンスが強いか。日本語では、「彼は甘い人間だ」とか、「女に甘い」とか、「解釈が甘い」とかいったりします。英語で、She is sweet. というとき、彼女がやさしく、温和で、愛想のよい女性という意味になります。また、日本には月を愛でる文化がありますが、ヨーロッパの文化圏にはありません。花鳥風月という言葉が日本にはあるように、四季を愛でる日本人にとって、月は美しい自然の一つなのです。ヨーロッパでは、月は不吉なものとして捉えられ、「満月の夜には殺人鬼がでる」とか、「狼男が狼になる」といった伝説があるくらいです。月を表すラテン語 luna から lunatic (精神異常の) という英語が生まれています。こうした様々な語彙のニュアンスの違いを取り上げていました。本稿では、そこで取り上げられたものを中心に、英語と日本語の語彙のニュアンスの違いの例をいくつか紹介したいと思います。

#### ① nation, country, state と「国」<sup>9)</sup>

日本では、「国」を表す言葉は「国」だけですが、英語では、country, state, nation と言い分けます。日本は島国で、民族構成もそ

れほど複雑ではなく、言語も方言こそあれ、概ね一つの言語で統一されています。こうした「国」で暮らしていると、「国」という概念を様々に使い分ける必要は特にありません。しかし、西洋をはじめ世界の多くの国々は、国の成り立ちがもっと複雑で、一つの国の中に、幾つもの民族がいたり、様々な言語が使われていたりすることがよくあります。こうした複雑な国の成り立ちをもつ世界では、どのような視点で「国」という概念を言い表すかによって、言葉の使い分けが必要になります。

country という単語は、最も一般的に使用され、国の支配権の及ぶ範囲、すなわち「国土」の意味が強い単語です。a civilized country (文明国) とか、a developed country (先進国) とかに使われます。

nation は「国民・民族」という意味もあることからわかるように、国民としての国というニュアンスがあります。Japan is a nation of hospitality. (日本はおもてなしの国) のように言うことができます。national character という国民性ですし、the national sport という国技になります。

state は、国の政治や経済のシステムを強く意識させる単語で、an independent state (独立国家) とか、affairs of state (国務) とか、the head of state (国家元首) とかの使い方があります。20世紀初期には、「民族国家」、「国民国家」という意味の nation state という言葉も生まれています。

## ②オノマトペ (擬音語・擬声語・擬態語) の比較

自然界で生じる種々の音や声を言語音で模写した語を擬音語または擬声語といいます。古寺の鐘がゴーンと鳴る、の「ゴーン」などです。自然界に生起する様々な状態を言語音で模写した語を擬態語といいます。べつと

りと血がつく、の「べつとりと」がその例です。この2つは、語音と意味が直接的に結びついているため感情に訴え、迫真的効果を与えます。絵本、童話、劇画等に多いのもそのためです。

しかし、日本語にはオノマトペが多く、英語には少ないという特徴があります。これは、日本語と英語の成り立ち方が違うためです。英語で使うアルファベットは、表音文字からなっていますので、音をそのまま単語に表すのに向いていて、音そのものが語源になっている動詞が多くみられます。パソコンのマウスのボタンをカチッと鳴らすのは click ですし、ベルや鐘をリンと鳴らすのは ring、重々しく鐘をゴーンと鳴らすのは gong です。アヒルは quack と鳴き、猫は mew と鳴き、狼は howl と鳴きます<sup>10)</sup>。

日本語は表音文字である漢字の文化圏です。言葉の多くが音よりも文字の意味から作られている場合が多いのです。「鳴らす」という動詞は、鳥の口から出てくる音という意味からできた言葉です。そのため、鳴らすだけではどのように鳴らすのかわからないので、リンリンと鳴らす、ジャンジャン鳴らす、ゴーンと鳴らすのように、オノマトペと組み合わせて音の様子を区別する表現が発達したのです。

## ③mask と面<sup>11)</sup>

英語の mask は「面」と訳されますが、この2つには大きな違いがあります。mask は何かを「隠す、覆う」点に重点が置かれています。「面」は、「表に表れているもの」というニュアンスが強い言葉です。また日本には、面をかぶることはその面が表す神や動物に自分自身が変身するという意識が強くあります。TRAD JAPAN の例文には次のようになっています。

Japan's many deities have diverse powers. By

wearing masks of various gods at festivals, people can assume their roles and dispense their respective blessings.

日本の神々は、それぞれに独自の力を持つと考えられています。そのため、祭りでは、様々な神様の面をつけることで、人が神になり代わり、幸せを分け与えるのです

古い日本人の信仰の世界では、人と神、また自然界にいる動物達は非常に近い存在でした。日本人は、人が面をつけることで神になるということも、ごく自然に感じられる世界観の中で生きてきました。

一方西洋では、maskは主に自分の顔を「隠す」ためのものであり、人間が他のものに変身するという意識はあまり強くありませんでした。人間そのものの存在を尊び、自己のアイデンティティを重んじる西洋文化では、人間が他のものになってしまうことは、喜ばしくないことだったからでしょう。ウルトラマンや仮面ライダーのような変身するヒーローがごく自然に受け入れられる日本に対して、西洋では変身というと、外からの力で変身させられた狼男のような悪いイメージがつかまとうか、ヒーローの場合でも、自我を失わない描き方が多いのも、文化的背景の違いからきていると思われる。

#### ④ greenと青<sup>12)</sup>

日本の「竹」を英語で紹介するとき、*Trad Japan*では次の英文で表現しています。日本文と英文の下線部に注目して見て下さい。

空に向かって凛と伸びゆく竹。すらりとした優美な姿。青々と輝く色合い。風に揺られて鳴る笹の葉の音。

A stand of bamboo thrusts upwards towards the sky. The stems are slender and elegant, their surface a vibrant fresh green, the leaves rustling softly in the breeze.

「青々と」がgreenと訳されていることに

気づかれたと思いますが、これは Words and Cultureでも触れてあるように、古来日本には、緑を指す言葉がなく、緑は青の中に含まれていたため、緑も青で表現されていたのです。『万葉集』でも、緑を表すのに青が使われていて、「青柳」や「青山」等があります。その名残で、今でも緑を使うべきところに青を使っている例があります。青野菜とか青信号とかがそれです。しかしそれらを英語で表現するときは、green vegetablesやgreen lightに置き換えて表現するので、上記のように、竹の青をgreenに置き換えて表現してあるわけです。

#### ⑤ radishと大根

英語のradishは「二十日大根」のことであり、いわゆる日本の大根の意味はないので、日本の大根のことを言いたいときは、Japanese radishとか、daikon radishとか言わないとわかりません。

「ダイコン」の歴史を辿ると、ピラミッド建造の労働者の食事に既に「ダイコン」が出されていた記録があり、そこからヨーロッパへ伝播した「ダイコン」は、「ハツカダイコン」、「クロダイコン」、「小ダイコン」に発達して栽培されました。東へ伝えられた「ダイコン」は中国で分化発達し、10世紀以前に日本へ伝えられました。日本では「ダイコン」の食べ方が発達し、「おでん」、「ふろふき」、「みそ煮」、「あら煮」、「漬物」、「おろし」、「なます」等にして食べるようになりました。ヨーロッパの「ダイコン」は形が小さく、利用も多くはありません。「クロダイコン」は辛味が強く、スパイス的に用いられ、スライスしてサンドイッチやサラダ用に用います。radish (二十日大根)はサラダやオードブルに丸ごと生食用として利用されています。

『古事記』では、大根は白い腕に例えられていて、現代の「大根足」といった使い方と

は違い、美しさの対象として捉えられていたことがわかります。また日本では下手な役者のことを「大根役者」といいますが、それには3つくらいの理由が考えられています。

1. 大根を食べてあたる（食あたり）ことがないので、あたらない（人気がない）役者という意味で。
2. しろうとのしろとかけてある（大根のようにしろしろうと）
3. 下手な役者は大根のように白く化粧して下手な演技をごまかすから。

古くは、radishはへびの嫌いなもので、へびはこれでたたくと死ぬとか、これの汁で両手を洗ってからへびに触るとかまれずにすむとか言われました。真偽のほどはわかりませんが、アメリカのゴールドラッシュのときに、がらがら蛇はインディゴが嫌いなので、ジーンズをインディゴで染めてがらがら蛇よけにしたという話はよく知られています。最近テレビでこのことを実証する実験が行われ、そのことが本当であることが実証されました。radishとへびの関係が実証された話は聞きませんが、案外本当なのかもしれません。radishの語源は、ラテン語のradix（英語のroot:根）という説と、その根の色から、OEのrude, rudo, reod,（いずれも「赤い」を意味する）という説があります。

#### ⑥persimmonと柿

日本で見られる柿は中国から伝わり、16世紀にはポルトガル人がヨーロッパへ伝え、明治時代に日本から欧米へ紹介されました。ブラジルへは移民によって伝えられました。

日本や中国の柿は、アメリカのpersimmon（アメリカ柿）と区別するため、KAKIまたはJapanese persimmonという形で呼ばれています。柿（KAKI）の学名はDiospyros Kakiで、Diospyros（神様がくれた食べ物）というだけあって、ビタミンCはみかんの2倍、

ポリフェノールは赤ワインの10倍あり、その他にも様々な抗酸化作用を持った成分が含まれていて、人々の健康と美容に貢献しています。KAKIという言葉は世界共通語で、以前テレビでパリの朝市が紹介されていましたが、そこではKAKIが3個2ユーロ（250円ほど）で売られていました。

英語で柿を意味するpersimmonは、アメリカ東部原産の、ぶどう大のモモの形をしたアメリカガキのことで、生では食わず、加工品にしてパイなどに入れて食べられています。persimmonの語源は、アメリカ合衆国東部の先住民族アルゴンキン族の言葉で「干し果物」を意味する「ペッサミン」であり、先住民がアメリカガキの実を干して保存食としていたことに基づくものです。

日本で柿は、奈良時代から食べられるようになり、平安時代には、日本最古のスイーツである干し柿も既に食べられていました。昔は甘いものが中々手に入らないので、どの家も柿を植えていました。芭蕉の「里古りて柿の木持たぬ家もなし」がそのことを垣間見せてくれていますし、その名残が今の日本でも見られます。

正岡子規は松山の夏目漱石のもとに滞在したあと、漱石から貰ったお金で東京へ帰る途中、奈良に立ち寄り、有名な俳句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」を詠みます。本当は東大寺のそばの宿で柿を食べていたときに東大寺の鐘が鳴り、それを句にしたのですが、素朴な柿には素朴な法隆寺の方が似合うと考えて、法隆寺に変えたのが真相だそうです。「写生」を目指した子規にもこうした構成の句があることに面白さを感じます。子規が奈良で柿を食べたのが10月26日だったということで、平成17年にこの日が「柿の日」になりました。

柿の木は、成り過ぎを防ぎ、樹勢を保つた

めに6月から7月にかけて自分で実を落とすといひます。これはJune dropというそうですが、自己管理のできない私からみれば、この柿の自己管理能力は脱帽ものです。

柿と日本人の関わりは長く、深く、小正月には成木責め行事というものがあります。これは、柿の木を脅して、豊かな実りを誓わせるものです。鋸や鉋で少し傷つけて柿の木を脅し、柿の木が、「成ります」と答えると、傷口に小豆粥等を塗って手当てします。柿の木の豊饒性にあやかって、新婚夫婦がこの問答をする形をとります。「早く芽を出せ、柿の種。芽を出さないとちょんぎるぞ」と柿を脅す「猿蟹合戦」は、「成木責め行事」を取り込んだ物語です。

日本には、「木守柿」という美しい秋の風物詩があります。柿の実を全て収穫せず、数個残しておきます。来年の豊作への祈願もあり、野鳥のために残しておくためともいわれています。今まで見てきたように、日本人と柿の関わりの深さがわかります。

#### 4 言葉の認識の違いから起こる誤解の例

一つの国の文化には、当人でさえも自覚していないごく小さな暗黙の社会的取り決めや決まりが無数にあります。この部分が、文化の根ともいべき基層を形成していて、この無自覚の部分の異文化間の食い違いから誤解が生じ、異民族同士の対立まで惹き起こしてしまう場合もあります。その例を幾つか取り上げ、相互理解を深め、友好関係の増進になればと思います。

##### (1) 太陽の色

以前、パリの日本人商社員の息子さんがパリの小学校で太陽を赤く描いてからかわれ、

登校拒否になった例がありました<sup>13)</sup>。日本人には太陽は赤色というイメージが定着していますが、英語圏の人々や西ヨーロッパの国々では黄色というイメージが定着しています。人間の目や耳は、自分の持つ固有の文化の中で、見たり聞いたりしますから、その他の見方や聞き方が中々できない面があり、いわゆる「見れども見えず」、「聞けども聞こえず」の状態にあることも確かです。日本人が太陽の光を「赤」と表現するのは、日章旗のイメージが強いせいもありますが、もともと「赤」は、「明るい」や「夜が明けて明るくなる」というイメージから生まれた語であるのに対して、英語のredは、「血」や「炎」のイメージと重ねることが多い語なのです。日本人もフランス人も、もっと無心に太陽を見れば、他の色にも見えるはずなのに、それぞれの国の言語文化に縛られて、上記のような誤解からくる相互不理解が起こり、登校拒否という深刻な事態にまで至ったわけです。

##### (2) アラブ人と太陽<sup>14)</sup>

日本の缶詰をアラブ諸国で販売したら売れなかったという話があります。原因を調べたら、太陽の印がついていたからだということがわかりました。太陽のイメージは、日本では初日の出とか、ご来光、お天道様、お日様といった言葉からもわかるように、とてもありがたいイメージで捉えられますが、アラブ人にとっては、一年中、砂漠で灼熱の太陽に苦しめられている呪わしき存在であり、缶詰の太陽の印を見ただけで不愉快になり、買わないということになったことが判明したのです。そういうアラブの人達にとっては、月こそ美であり、救いであり、希望であるわけです。イスラム教国では月が、特に三日月が称揚されていて、シンガポール、トルコ、パキスタン、マレーシア、モルジブ、アルジェリ



ア、コモロ、モーリタニア、チュニジアの国旗には三日月が描かれています。

### (3) オレンジ色<sup>15)</sup>

社会言語学者の鈴木孝夫氏は、オレンジ色の本当の意味を知った体験を書いておられます。氏が、米国コネチカット州ニュー・ヘイヴンにあるイェール大学で、「日本語と日本文化」の講義をしておられたある日、ホテルの入り口でオレンジ色の車を待っていると、予定の時間を過ぎて中々来ないので、どうしたのだろうと置いていたら、少し離れたところに茶色の車が止まっているのに気づき、聞いてみると、それが迎えの車だったということでした。オレンジ色の車といわれていたのでわからなかったと言うと、この車はオレンジ色だよといわれたそうです。このことで、英語のオレンジ色は含まれる色の範囲が広く、「明るい茶色」もオレンジ色だということがわかったということです。英語のオレンジを日本語のオレンジと同じだと思い込み、誤解していたということですね。このことがわかったおかげで、長年疑問に思っていたことがすっきりしたと書いておられます。それは、アガサ・クリスティの*The Clocks*『沢山の時計』や、モンゴメリの*Anne's House of Dream*『アンの夢の家』に出てくる“orange cat”の意味がわかったということです。翻訳者もわからなかったので、*The Clocks*の翻訳では「オレンジ色の猫」と訳されていますし、*Anne's House of Dream*では「みかん色の猫」と訳されています。翻訳者もいろいろ調べたはずですがとうとうわからず、このような訳になったということでしょう。鈴木氏は全く偶然にこの色の意味を知り、長年の謎が解けたということですね。

### (4) イギリスと日本の文化の違いの例<sup>16)</sup>

英語教育の目標は、交流言語としての英語を話す能力を身につけることの他に、英語を用いる人々の文化を知ることがあります。その一部を、鈴木孝夫氏の『日本語と外国語』で学ぶことから始めたいと思います。

イギリス人が絶対に食べないものとして馬肉があります。イギリス人にとって馬肉は、イスラム教徒やユダヤ教徒にとっての豚肉に相当します。イギリス人はヨーロッパの中でも、馬肉は人間が食べるべきものでないと考えた少数派に属する文化を持っています。おそらくイギリス人が長い間馬と親密な関係をもってきたせいでしょう。これに対して、フランスには、馬肉だけを専門に扱う肉屋が国内に3千軒もあるほど馬肉をとっても好みます。

イギリス人は犬の肉も絶対に食べません。これもおそらくイギリス人が長い間犬と親密な関係をもってきたせいだと思います。韓国では犬の肉のスープ（補身湯：ポシントン）は男性の好むご馳走のひとつで、香港やフィリピンでも犬の肉はご馳走の一つです。イギリス人が馬肉も犬の肉も絶対に食べないという食文化を持つ民族だということは、今のよう国際化時代においては知っていなければならない重要な知識ということになります。

イギリスの小学校にも運動会（SPORTS DAY）はありますが、日本と違うのは、賞に現金がでるということです。イギリスのような民主主義の草分けのような国では、強い者、努力した者は、それ相応に報われるという、現実の社会を支配している競争原理を、小さな子どものうちから学校で教えているということです。

鈴木氏は、イギリスの靴屋にはくつべらが置かれていないことに気がつかれました。ホテルにも置かれていないそうです。かつて英

領だったオーストラリアとニュージーランドのホテルでも同じだということでした。今は日本人観光客のために置くようになったということですが。

イギリス人がくつべらを使わない理由を考察する前にまず日本人の履物のことを考えて見ましょう。日本人は長い間、ゲタやぞうりのような、足全体を覆うことがなく、足を締め付けることのない楽な履物を使ってきましたから、明治以降、靴という窮屈な履物に慣れるのに大変でした。しかも日本は湿気が多く、足がむれたり、水虫になったりするので、なるべく足に緊迫感を与えない、ゆるめの履物を履くという文化を身につけることになりました。この2つの理由で、日本人は、靴を脱げる場所ではすぐ脱ぎます。日本人はこのように、1日のうちに何度も靴を脱いだり履いたりするので、くつべらが必要なのです。

これに対してイギリス人は、足にきっちりした靴を履き、一日中どこでも靴を脱ぎません。履くときは靴紐をゆるめ、靴を開いて足をいれ、再び紐で強く締めます。だからくつべらは必要ないのです。家の中でも靴を履いていて、脱ぐのは寝室だけです。長い年月このようにきつい靴を一日中履き続けるので、イギリス人は年をとると足の骨の変形からくるいろいろな病気を患う人が多くなり、足病医 (PODIATRIST) という専門医が繁盛することになります。日本でもファッション・モデルの若い女性の間には外反母趾が多いのは、細い靴を無理していつも履くことからくる職業病なのですが、イギリスでは普通の人がかかってしまうのです。

日本人にとって素足を人に見せることは悪い事でも恥ずかしいことでもないのですが、イギリス人にとっては、どんなことがあってもみせてはいけないものだそうです。素足は、

寝室だけに許される恰好なので、人前で靴を脱ぐことは、寝室の行為を連想させ、強烈な印象を与えてしまうそうです。イギリス人にとって靴は、恥ずかしい足という身体的部位を他者の目から覆い隠すものであり、「素足に革靴」といういでたちで売っている日本人タレントのことはイギリス人には理解できないことの一つかもしれません。

## 5 終わりに

国際理解とは、「文化の相互理解」(inter-cultural understanding) であるといえます。他国・他民族・多文化の生活様式・行動様式・思考様式を共感的に理解し、世界中の国々の文化の多様性、価値観の多様性を受容し、相互に尊重し合う心を深めていくことが目標です。鈴木孝夫著作集のような本を読めばかなりのことがわかりますし、TRAD JAPANのような英会話番組も大いに目を開かせてくれます。また、内外でのボランティアの機会が持てれば、国際理解は一段と進むと思います。しかし、外国の文化、考え方、風俗・習慣の目に見えない部分は、その国を訪れても、長年住んでも、偶然の幸運に恵まれないとわからない面を持っています。常に気をつけていないと、せっかく見えた糸口も、見過ごしてしまいます。このような文化の側面は、その国の人にさえ意識されていないことが多いので、本当の意味での異文化理解は、大変難しいことがわかります。だからこそ、絶えずWorld Studiesを行い、国際感覚を身につけていく努力をし続けていくことが肝要だと思います。そして国際理解で最も大切なものは、ジョアン・マッコネル氏が言うておられるように、「開かれた心」と「暖かい心」だと思います<sup>17)</sup>。自分の価値観を押しつけず、相手の立場や見解に敬意を持って接すれば、相互

理解は可能になると思います。私は英語教師の立場から、英語と日本語の語彙の内包する意味の違いについて主に書きましたが、これは国際理解のほんの一部に過ぎません。国際理解が含む内容はとても広いものなので、これからも少しずつ深めていくことを目標にしたいと思っています。

## 注

- 1) 村野井仁他著『実践的英語科教育法』, 成美堂, 2005, P. 189
- 2) Ibid, P. 190
- 3) 藤田実他著『ことばの世界』, 大修館書店, 1985, P. 9
- 4) Ibid, P. 7
- 5) 2010年7月31日付中日新聞朝刊, 「英語の質問箱」より
- 6) 鈴木孝夫著作集5『日本語と外国語』, 岩波書店, 1999, PP. 33-4
- 7) 藤田実, P. 10
- 8) NHK テレビ『トラッドジャパン』, 2009年5月号, PP. 44-5
- 9) Ibid, 2010年1月号, PP. 108-9
- 10) Ibid, 2009年12月号, P. 172
- 11) Ibid, 2010年1月号, PP. 140-1
- 12) Ibid, 2009年5月号, P. 57

- 13) 鈴木, P. 44
- 14) Ibid, PP. 45-6
- 15) Ibid, PP. 9-14
- 16) Ibid, PP. 102-12
- 17) Joan McConnell 著, 雨宮剛注解『ことばとコミュニケーション』, 成美堂, 1992, P. ii

## 参考文献

1. 村野井仁他著『実践的英語科教育法』, 成美堂, 2005
2. 藤田実他編『ことばの世界』, 大修館書店, 1985
3. NHK テレビ『トラッドジャパン』2009年4月号~2010年3月号
4. 『鈴木孝夫著作集』5『日本語と外国語』, 岩波書店, 1999
5. 『鈴木孝夫著作集』2『閉ざされた言語・日本語の世界』, 岩波書店, 1999
6. 大橋久利他著『食文化で知る東洋, 西洋』, 成美堂, 2005
7. James Pavoux, *English Customs With a Smile*, Seibido, 1994
8. Joan McConnell, *Language and Culture in the 21<sup>st</sup> Century*, Seibido, 2000
9. 渡部昇一著『英語の語源』, 講談社, 1977
10. 中尾俊夫著『英語の歴史』, 講談社, 1989